



卒業生として高校教師として

山田美奈子

体育専門学群第十六期卒業生

はじめに

今年は卒業10周年を迎えます。大学剣道部の同期とは記念の同期会をやろうと計画を立てているところです。筑波で一緒に過ごした仲間も今は全国に散らばってしまいましたが、剣道を通じて連絡を取り合う親しい付き合いが続いています。大学3年生から修士課程まで4年間在籍した体育哲学研究室の皆さんとも学生時代にお世話になっただけでなく、今でも学会等での交流があります。

現在は千葉県に戻り、保健体育科教諭として県立高校に勤務していますが、大学での人間関係は今の私にとって必要不可欠なものになっています。教科教育、生徒指導、剣道部指導など自分のあるべき姿を模索するとき、大学時代の友人と話すとき必ず何かが見えてくるからです。

つくばを離れても筑波大学とのかかわりはなくならないし、むしろ強くなるような気もします。

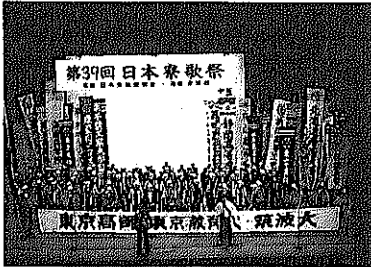
同窓会活動

筑波大学を卒業すると自動的に同窓会である茗溪会に入会しますが、関連した同窓会活動がとても多くあり、会費を支払ったり総会や親睦会に参加したりしています。茗溪会にしても、全国茗溪会の下に千葉県茗溪会、その中の若手で青桐会という会があります。さらに体育関係者の茗体会、地域ごとの茗体ネットワークなどもあります。剣道部の同窓会は茗友会といいますが、全国茗友会の下にはやはり千葉県茗友会があり、同期では剣悠会という会を作っています。

寮歌祭

数ある同窓会活動の中で、私が最も衝撃を受けたのは寮歌祭です。全国の大学(旧制高校)のOBが大学の寮歌を歌うお祭りです。以前は日比谷公会堂で100校近い学校が持ち時間約5分で一日かけて行われていました。そこでは「筑波大

学」ではなく「東京高師」と通称され、「桐の葉」を歌うのですが、号令をかけるのは大先輩です。参加者の中には袴姿に下駄履きの方も多く、現役の大学生も参加していたのですが、圧倒的に年配の方々が生き生きしていました。



茗葉大会

一番身近な活動といえば茗葉大会です。毎年2月に千葉で行われる高校生の剣道練成大会なのですが、茗溪の同窓生が顧問をしている高校が関東各地から集まります。私の場合、高校時代の恩師も茗溪だったので、高校時代には選手として参加していました。そして今は運営する立場で参加しています。多くの同窓生が生徒を連れてきてくださるのですが、埼玉からはお世話になった先輩が、栃木からは同級生が、というように筑波で共に稽古した先生方と会う機会となっています。とても励みになります。

卒業生として

このような同窓会活動を振り返ってみると、県立高校の部活動を指導している教諭という立場もありますが、卒業後も仕事上のつながりで同窓生にお世話になる機会がとても多くあります。

ただ、年齢的にも教育大時代の先輩が中心で、筑波大学出身者（さらに私より若い人）は少ないのが現状です。最近では教員採用試験が厳しいようですが、教員養成の歴史ある筑波大学の卒業生にぜひ千葉県の教員になっていただきたいと切望しています。

高等師範の時代から千葉県では茗溪の先輩が教育界の指導者として活躍されています。少子化により全国規模では教育系学部が縮小されるようですが、母校の筑波大学には歴史と伝統を引き継ぎ、さらに発展させることを期待しています。

高校教師として

高校教師としても大学とかかわりがあります。昨年の秋に、勤務校のPTA研修旅行として校長や保護者の希望者が筑波大学に見学に行かせていただきました。この研修は大変希望者が多く、バスの都合でお断りする方がでるほどでした。本校はいわゆる進学校で、生徒も保護者も筑波大学に対する関心が高く、実

際に数多くの卒業生を送っています（私もその一人です）。残念ながら私は留守番でしたが、担任している高校2年生のクラスでは保護者4名が参加されました。

この生徒たちには共通点があります。それはスポーツと学業を両立させたいと考えているところです。全員が男子生徒ですが、1人はインターハイに出場した競泳の選手、2人は甲子園を目指している野球部員、もう1人はサッカーの上手な生徒です。勉強も熱心で大学進学を希望していますが、一番体力のつく時期を恵まれた環境で過ごしたいと、競技力の向上も考えています。

一人の高校教師として、筑波大学はこのような生徒の要望にこたえられる大学であってほしいと希望します。私が学んだ体育専門学群や体育研究科にはその道

のエキスパートがそろっていて、高度に専門的な教育を受けることができました。体育専門学群に限らず他の学群に入学しても、研究でもスポーツでも高いレベルを目指せる魅力的な大学であってほしいものです。学力偏重の時代に文武両道の若者こそ次代を担う金のたまごだと思ふのです。

おわりに

ただ「断れない」というだけで母校とのつながりは多くなるものです。「断れない恩師」「断れない先輩」から言われるままに、同窓会に出席し、原稿だって書いてしまうのです。そんなふうにして10年経つと、なぜか卒業生としての自覚に目覚め、今では本気で母校の飛躍発展をお祈りしています。

(やまだみなこ)

